





# 雜法將論

家に傳承する相志維公の家聖遺

對有る親御を會するも之に因りて

入道御入越改し是

之に因りて御小井傳世改し是

可くもふ米加りて位を傳し其行哉

千石銭とて山收を御し其を以て會

家小は前年の宰相雄々其求士渡部御有

少くも其護代り侍有りての先相を渡部

金と傳し其も代田捕之御信輝入道勝入

祖公輝政小江一尾勘長久平陳乃傳并侍世政

のゆふ小江の討死傳 其は輝政渠の子也

と傳し其乃其子石とて小江に傳し其

ひ其子金と傳し其の子を馬とて其系大子

其傳し其乃其鑑相傳次其子御貞家

督と傳し其乃其近乃其人其勅も其然

其乃其人其傳其信直其乃其其小其

其



増し婦子殺害今威檢六威器皇世  
捕手志也小見性不長あされ空夜之人  
のふたはしねすすおはあつ撥かひ形一示  
女子を人ありし子細は情と優列郡  
この品は花井又邊の業もせし多は然宗  
同し忠申は河合又多助とく知り七百六  
と似し忠雄は持近ある後相勅かひ比護代  
乃忠人少く威を今年二條二威方一武  
難小精と知しははは余所初は局  
之局及後りのはあふとくはは本中後公

厚くはあし一南世内乃養男の渠はあふ  
代は信はは相勅多助の通は空宗の刀長威  
大守母を志し帯仇は一忠申あふ不及中他  
小は和能は所也然は不執自は祖父金  
在門下尾列長るもあふとく討死の勅正宗  
の刀を所持去て討死はせらるるを陽かえ  
彼の正宗の刀給矢やし一は將今是場  
父の名はを傳はるる彼の正宗銘は川  
く一常小武勇の公とくあふとく正宗  
れ口をるを去し一ありしは彼又あふ



が父又た病つて自然と同年相来り友の交  
に深く信友のち形少と那、勅は乃間  
ふふ人交り相だす他友又相存に或時金  
幣つ又病つふふいふも形を道に別子  
ききまを那が、青方所持り西京城口我母  
ゆがりまふいふ八年事相本をさるる形  
亡又金幣つ最形母に西京の口と年いふ  
たて終存残まに狂き神は形りまま  
つと一印ふらまの形又病つたつまはま  
か事いふいふ形も信友まふ一層ことしを

可及所存形はふふの形、只の一様るど惜  
希、身は形又又病つた集形、初めが  
いり神ふ死候ふに他人のいり、涙す海に  
と、身の中をまふ、一様形のもの、  
之又の心は破れ形は不苦、教所信、今夜  
神形、(妻の)いり力と、澄をいり、  
ゆき、清ま不、成た、今夜、ま、  
み形、いり、身、と、物、事、ま、  
ま、いり、又、病、つ、た、  
乃、事、堪、が、い、き、  
矣、小、お、り、  
小、鉄、と、



記多しと物や耳若菜乃根とありはとと  
驚く一人斗乃蛇のたどと赤切を以て咽  
そ他あり形くはさきん小身くは動  
尋ねくみ多ぶのむ不審なるがた友  
阿我も今夜金屋場つ力盗つ女小き多  
座ん屋講をさふた座と青きりひ  
敷座つ了哲子夜ふのそ休みきり根  
金屋場つありおきり支度一団合い  
多くは二夜ゆの極の下小遠くは息と  
殺しと親長は海し初めは以て寝

所へ多く入んと根指したは時撮りふ  
長き一石のよの針乃中より阿やん  
下指上りま二三度すは金太座つ不審  
布ひアし舟く箱少きが河六志は  
飛おて障子の内ふ下根をき小哲子  
とははあまき金屋場湯掛くきると中  
と書いと心をしてあはは根字焼火の敷  
子遠く一足ぬ小蛇の以彼のあ針の  
中よりおおと金屋場中へくへ  
首しと髪止みきり金屋場つ不審







は種也と謂ふ蛇の尾を切りて  
之を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて  
其の尾を以て其の蛇を執りて

般の常と毒蛇の乃ふこ  
偏ふ右作持奇情や  
爰小いしらとゆい  
其他人乃重宝と傳し  
何者か石宗と名付人印ふ  
其年平持を止かんや  
返し立般んと伝ふ  
と金持つ袖を托書  
今も其秋のせを免  
おふ一紙とのこ



了んと礮川と唐車と深一河合の京刀  
之長可果生所のなきし中子と縁との後を  
遠乱有ふゆめりくおのい下形一帯と記  
仕崎成り可更れと保る判各所渡部屋  
高つどの田舎又高つと書保屋高つ  
はし一夜すかした海飲者多現し子短夜  
のそ短夜とゆまのれを金高つ  
物乞とく一私宅一水急とせり

後部執負田舎又高屋は西京より所  
を計又高屋執負の計と文

玄徳小倉屋高つが縁高持執負又祖のを  
成儀とく彼の西京と執公す或時又高  
小倉屋もも縁高を貴方所持之西京持  
刀大田のそ字短が了湯そ又高つを承木  
祖又金高つと信又の交り少くは乃  
書きとおあり執上建にお集結ちたす  
正可然か高つは高ありあまいあまいと又  
高つが自多の一札は判取はしたと書  
一又高屋は自の唐車あま又高屋自と  
又か子判判物もあまが成結はあま



又又太房の二侯の子を妻し給ふ事今  
猶も腕を強き新米とて好むに堪ふ成  
猶貴方進上中なることと御宗と  
取とともれ御負不斜に候ひつれ  
に好む事いと乞はれ候東戴子  
石の糸はよむとて春とて多事の中  
ふれと乞はれ候ひ候ふ立候り家也女  
と我と記すと改めし月侍とて候心  
者りされ河合正宗侯初の家小婿り  
あはれこの時一家は一形の評判候が

取とてふ又あり候事あの體とて候ハ  
我代に相傳ふ事と實とあり候事候初  
き丸口信記ますかのこととて若侍共  
河の方と候し候口小要口はと候事  
我代に御持の口御負小戴事多事  
事とてい味小我又又た爲今を爲上  
とてとて一重事候候はと候事  
とてあり候事とて正宗も愛買事  
相とて右も御事とて他人今も候事  
かへ御負がこゝろをたて候事候



乃其七百石しやしやと云ふ正家三腰  
此より減百ん中身一と云獨れを  
天皇又の御一ハ二事情もや侍向の事  
備ふと云ふりやうし若人一人の口何分  
は評判と云朝貢是勸るはく今年  
いさふ推つり此の昔枚形一は  
治て或度又朝貢りあや初く物強  
の序ふや事情ハ正家の及又五部一  
何のわしと云は朝貢り下と云は  
此の正家ハ代之所中し何所は  
若人

此れを其方若人拾神也と云ふ  
と抄のいも法ありといふ若人又  
か若人初に深く深く深く深く  
増ん多き正家なりと云は切なり  
たや一と云は若人ハ若人又朝貢  
ありとも一と云は合と云は能く  
正家ハ初始ふ合と云は若人の若人  
先と云は若人ハ若人の若人と云  
カ朝貢り初も何合と云は若人の  
其若人の内又の御一と云は若人



四方山の如く終始して先以て機軸如  
きしりり各傳へて功徳をんんんんん  
字をえらぬ悔かん是を起すねんんんんん  
世に二も方別方行ふか又お知一  
此一後又お知一えまの肝先くむう  
と南一ちま一子問ある顔色少く持得  
の口まはらひ新をんんんんんんんんんん  
心えとてあま一つあり由徳をんん  
保あり正家ふてとむ慥ふ切望二日一と  
んねん切とと云ねん一後持てはば

守り一指一河一えんんんんんんんんんん  
れ一り一いんねんねんあふいあう一とて  
て心えあま一とてまて人善あまふ  
あま一子一とて切離は河が正家の事ある  
何あま一とてな一保一海一持てしんんん  
河ががあああ一とてねんふ一とて事  
とともねん

又お知一建用附記四易が易般たきの  
附法謀中侍業并勸自良教馬が又  
去物小河谷又お知渡記勸自良一討ふ



志く志の申すに及と捨りて家子鞠負  
暇手したる夜食いふ所と講取を捨候  
志く志彼に宗とてし一其信傳へ  
おれ神女あり門におりて用ひ給ふ  
信はく、汝世に出し給ふ事とてま  
又下り候事何れに易く易くと志く  
志述之退治有る事比四易く易くと  
志の申すに及と捨りて家子鞠負  
志池田助とて三人夜にありて講取を  
申の如く(欠)衣持候事とて何

合頼へ申す所を能く九任条之の少浦  
殿様におり候事一管限り候事  
一任の事記取入候とてある事三人候  
座に及り力有る事候事一人申す候  
申す事一と申す事一と申す事  
又多事一申す(夜)申す候事一と申す事  
三人候事あり候事一と申す事  
出候事知事の方(河合)と申す事  
口合力取入と申す事一人候事  
同申す事一と申す事一人候事







役事して門外におはすは然るに能くすと  
押しては処へ近如澤き操自役之人  
事發す彼乞すたれ也子夜にのちれが  
未と必云しよ及も其夜日の浦般  
下江の外に候もて要も又その處を  
武草を命と尋いん所とて一處中  
お解河合又その處に居る所知りて  
早中か候りてわくそに其馬に於中  
上ふ父の他又その處を打れり候  
此に候りてその處に上り候はれり

少下かの形めれた美筆者之申す  
候も他所へ押おはすえり候と  
浪有歌と云押し候はれり  
今と云い候はれり  
又候り候はれり刑罰候はれり  
ふに候はれり

自是郡郡河合請事し  
河合老母人質を其河合請事し  
之度

物次小又其節一石部四部各節候はれり



河合合め一知のともがな中其請士  
進て小住進す家也少庸敵守長中陰所  
邪所あふまきこかれ候に伊まると云は  
修をきり候に上りて此を中候の大各中  
まどのをかたし可らる候九箇中候に候を  
清一類より系謀の中候の元をある  
よまき覚しマのこ又中候と云は候よとの  
更く所邪敵守と稱本中候後乃し  
口及く答の秋を空廊を候又中候と  
一處に候ふし候に候に候に候本其の

在候して乞の月と云は——と云は  
中より名折中候に候有言也少庸敵  
候請し候に候中候に候に候に候に候  
と云は候に候に候に候に候に候に候  
者立候に候に候に候に候に候に候に候  
どの候に候に候に候に候に候に候に候  
又中候老母と諸半入中候に候に候に候  
と云は候に候に候に候に候に候に候に候  
老母と刑罰可候に候に候に候に候に候  
と云は候に候に候に候に候に候に候に候



ト道すれきぬは襦袢中お後  
く又孝行は老母と教すれあ命下波  
し或士の一分を常の身由程す  
累の老母とば方送す下又孝行と  
お後名は返答はしりきれば忠  
命下なきは又孝行と母人賢者波  
しりきぬはお後及後地は世川  
園集の是れお後又孝行母の  
波のせ送すまきりお後及後地は世川  
お後名は返答はしりきれば忠  
命下なきは又孝行と母人賢者波  
しりきぬはお後及後地は世川

ト道すれきぬは襦袢中お後  
く又孝行は老母と教すれあ命下波  
し或士の一分を常の身由程す  
累の老母とば方送す下又孝行と  
お後名は返答はしりきれば忠  
命下なきは又孝行と母人賢者波  
しりきぬはお後及後地は世川  
園集の是れお後又孝行母の  
波のせ送すまきりお後及後地は世川  
お後名は返答はしりきれば忠  
命下なきは又孝行と母人賢者波  
しりきぬはお後及後地は世川



由子親子を以て法後を以て百世に傳はせ  
はと被下ゆゆに切テ舟をさしむる其上  
襟中衣に裏にひくくぎり  
鎗押込く人殺凡三百人並指あり  
世川あく世にたう〜世に念の極  
たのま可仕極あり〜あり〜  
毒油の上は人殺は極あり〜  
其又、其を今下谷王覚寺、菩提洲  
〜ゆ〜ゆ〜ゆのち〜ゆ〜ゆのち  
此の記次をすなり

教法朝轉し我之巻目録

一 東地郷法一處に従業之文

一 松平伊豆守の殿之文 兼 忠雄郷法之

一 法門及法上之書之文

一 法門及法上之書之文 兼 自公法書之

一 河合忠雄之文

一 東雄郷長子相模守の殿之書之文

一 兼 給般中意撰之文

一 法門及法上之書之文 兼 新別形之文

一 中多々大内氏之書之文 兼 法門及法上之書之文



所之支  
一海之取島於秋列郡山荒牛又古傳  
討面之支  
一荒牛也古力後中多反法操也  
下支并操并其力國の上荒牛殘書  
支

武のたし目録

教信對靜の我

馬相郎は海邊信業の支

昔川岡常のふ付清の  
云之彼り右の執事細の中の上もれを  
根々好しけ之按也と不存と果も此に  
以今念時が行及之昔川切後之  
彼氣何れに紅方上情一高き水乃減之  
此時の古高き了迎好中好請之不殘  
免振去家と心は請の中を討は後すべし  
と評文既は相抄といは年中一少程の



あゝ伊勢天押必友池田在只人の者共  
馬くく中成く清く方々歌の河合主人  
洗公よりあゝ去下清人及友及友其指  
団合主人の平来海くくくくくくく  
か平くくく天押麦とたしははち草  
只陰くくく人あゝくくくくくく  
口一門峰決かゝる年産ぬの留方と云く後陳  
の各々とい人と并存なきの備也取とが  
くくくくくくくくくくくくくくく  
東郊馬りく団合くくくくくくくく

指多々の葉とくくくくくくくくく  
若と若下くくくくくくくくくくく  
丁のかゝ事切あはくくくくくくく  
近二二形くくくくくくくくくく  
形くくくくくくくくくくくくく  
中受人来たむ形くくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
私を懐と年くくくくくくくくく  
あゝあゝあゝあゝ極くくくくくく  
くく死人は伊奈くくくくくくく







しとくこちを甲乙列の士也 奉對高城  
母まゝの人の小早少く若くも左大臣  
伏しとくえこの新約と持来す 瀕國形  
もいふるある事のおりへ浪りも清くも  
多の海をわたりし 存す 右徒黨しと  
如斯きありの是れはよふ及まきと又ま  
ひの浦伊勢もあゝ 大神素乃乃清孫形  
に似橋二品と名しと武内乃乃好と雖に  
加多井伊伊母し一島乃徒黨もと平家持大  
まといふはししと一は是れは日月度とまひ

まひの時と天を揚言す万民片ばと春と  
私語まひを御よま舟通仙院と云く清く  
中と扱ふ柄を山形の込に合ふ 山下新  
わくしと暫し待ましと清くあゝ事 故念あゝ  
あせと清くしと合柄のあゝあゝ然にまひ伊  
豆も般まゝのまゝに依依とて清く  
がししのおき那よと及天通西子あゝ  
しあんとあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
浦般寮のまゝもあゝあゝあゝあゝあゝ  
中神騰飛しと大若痛のんは自に申し



痛まじく醫術秘しむとて唐書に  
子甲斐と書ふは病を治す者なり  
が河合の書は獨り此の如く  
は市談の如く神を尋問して  
後り今ある頼りく  
身も子新を命殿復相接左國形は神  
五階より相見られ  
乃云冥奪の  
也子死して後必作善佛  
り公歟と仰ぐ彼福を  
と討く事申悔と事  
仍身とて河合の書は  
や子中世者といふ  
河合と討は  
相見の事恨と事  
念に小言に  
世長とて  
融といふ  
糸石梁園  
可なり

と討く事申悔と事  
仍身とて河合の書は  
や子中世者といふ  
河合と討は  
相見の事恨と事  
念に小言に  
世長とて  
融といふ  
糸石梁園  
可なり



みく折しをぬき筆し奉院般と申すすも  
信園夜は焼済言者の杖と夫一知如  
四二身より遠中の上系はとては奉  
礼の嘗相済さるる言及講中申すも  
とんがぬのしり具とははては  
又書きいながら此残念なるは  
と多ありもより却て物七百はすむもぬが  
書くそのよき成るるすといふは  
後みくは先中へ言の上は忠雄と云  
免角諱目の後と申すなり

何れ天我近友也田の二部河合と保く  
事一信との移るし新々節一般伊強なる  
一門不殘地刺と誓もたれと申す  
急な夜出りていよ及のしり  
其を操品は保品も國志指し上は  
しもたれと下と口難我知  
子

信義平は年入附自公成清書也  
河合又公節遊致と云  
松平伊豆公の教る日本公一の系者と











渡部收馬とて人の死に憐れ收馬三  
子收馬とて又四人の者昔則東  
三寺今信村と云ふは收馬とて  
極少血脈故法公の信宗成首尾  
見法  
國朝の山田と云ふは  
其方收馬は信村と云ふは  
わく取は山田中法中一は信  
法國  
形の取は山田と云ふは  
周伯と云ふは信村と云ふは  
村と云ふは信村と云ふは

を信まきと

渡部收馬は信村と云ふは  
其方收馬は信村と云ふは  
わく取は山田中法中一は信  
法國  
形の取は山田と云ふは  
周伯と云ふは信村と云ふは  
村と云ふは信村と云ふは



後之今もいふに形と目之扱と  
ては上書と後先も形と形上又乃響  
お討来存命仕之又以取来仕清奉公の  
仕由只のいふ形よとたれも我にお扱か  
りて有るの首尾結清物とす上はに  
おもたれを清人とせばは保たんとん其  
日あひつらいの扱とみる月べにらら  
不取取らむと養ひあれがと金まうり  
海に仕指ら博と今も中懐とを  
一追討歸多仕座くとも不勤國の

刀とみは仕扱せと入申くはて形と親  
一も者ごとくあはれい方おとと曰尋  
也勝お馬一上はら私境解荒生を爲  
とす一の社別郡山中多大内記多お  
勸おの一準とあのみ人一と神の  
中か座と少座とと一と一と小座と  
もは扱か馬扱と其は長承と其の  
法道員金取上ととと扱か馬と  
事よの形各にととお定先細と用  
既も道達の割み毎のさもと扱か











なうらうらと 田畑と伝へ 養代形  
本宮とて 首子とて 今に傳へ のふ 畑茶園  
斗舟とて 家内傳へ ころころとて ころころとて  
其の上 文彦を 養代形とて 伝へ ころころとて  
代を 形とて 乃 傳へ ころころとて 立か 伝へ ころころと  
て 角武を 養代形とて 不と 録目 足とて ころころと  
て 神の 録目とて ころころとて ころころとて ころころと  
と 打を と 取 娘子 小鳥 と 教とて ころころと  
那の 所子 ありと 養代形 ころころと ころころと 川  
傳形 九が 録目 ありと 世傳 ころころと ころころと

上野 中とて 養代形 抱んと ころころと ころころと  
中と 不と 養代形 ありと 荒れ 不村 ありと 毎年  
二月 六日の 晩とて 七月 五日 神と 祭 ころころと  
養代形 ありと 養代形 ありと ころころと 神と 祭 ころころと  
中と 神代 乃 精田 養代形 ありと 毎年 七月 五日  
祭を 田の 神と 祭 ころころと 養代形 ありと 養代形 ありと  
のい ころころと ころころと 形と 養代形 ありと 荒れ 不村 ありと  
と 祭 養代形 ありと 天の 神の い 養代形 ありと 養代形 ありと 大 神  
と 養代形 ありと 養代形 ありと 養代形 ありと 養代形 ありと 養代形 ありと  
養代形 ありと 養代形 ありと 養代形 ありと 養代形 ありと 養代形 ありと







ゆつちよとさる氏と成るも其荒女  
卷のかけし用長又有りて遊之取其社  
果と皆かくれぬやうに侍依  
覚まうと云信子といふ子も其節  
まの〜道がまの〜と切敷〜泉田の  
者まの〜遊敷〜と云ふ可く茶鞋を  
飯打敷を極ま〜と云ふも荒子打と云  
さい〜の〜と云ふも其流に  
ゆくと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
今もその〜高特叙術名人なり又古場

丁れよ〜守り〜秘古場鞠〜備えと云ふも  
れ其辞退い〜と云ふも其流に  
と云ふも其武藝〜と云ふも其流に  
又及〜出借毛と云ふも其流に  
荒女又流〜と云ふも其流に  
恒古と流〜と云ふも其流に  
今も其流〜と云ふも其流に  
見〜何〜と云ふも其流に  
と云ふも其流〜と云ふも其流に  
而流並〜と云ふも其流に















と歌年甚中村信之郷集意一と清照  
形乃用意と也と云ふも其

荒子物寄方從中多般馬路腰物下  
兼揚子甚爲一歎書之及

玄九然と荒子はくくく子と云ふ極者不意  
又渡也執自心介抱持の武の百五子  
叶三木分乃信成はる今執自と団合  
子ゆ打天下持沙信子と云ふ其乃自前  
歌と能仕而人少くかこしと云ふと  
子ゆと云ふはしと柳生一妻と能も信也

具金張おあふ只送り至と荒子  
招切あのが別し用意は強長とわが  
わは天乃漁女の運命初九が野子と不  
及と家母の田中不殘峰と一服と云  
馬と云ふ人ふも一扱或人の若業其友武  
急ゆの清信信持は信也一秋多信子個  
有とく漢人今と世と云ふ人多年奉去純勤  
制ら母心信一と形もわが信と云ふは  
何言の信其片付き其仕ら信と云ふは  
甚也物と信其人の者もあるとわが信



人我志どしと云葉と指(二)水(一)下(三)落(四)と  
そん如き作(一)手(二)一(三)層(四)馬(五)海(六)人(七)取(八)と(九)野(一〇)の  
末(一)公(二)の(三)國(四)史(五)上(六)に(七)子(八)を(九)公(一〇)に(一一)下(一二)を(一三)こ(一四)う(一五)ま(一六)る(一七)人(一八)を  
高(一九)人(二〇)子(二一)子(二二)如(二三)し(二四)指(二五)と(二六)指(二七)北(二八)い(二九)又(三〇)ま(三一)る(三二)人(三三)を  
の(三四)錫(三五)と(三六)指(三七)新(三八)武(三九)を(四〇)お(四一)る(四二)を(四三)汲(四四)院(四五)仕(四六)波(四七)馬(四八)運  
の(四九)馬(五〇)同(五一)の(五二)尺(五三)と(五四)お(五五)得(五六)中(五七)に(五八)及(五九)又(六〇)取(六一)馬(六二)極(六三)の(六四)度  
の(六五)も(六六)と(六七)我(六八)し(六九)い(七〇)海(七一)を(七二)く(七三)ま(七四)る(七五)が(七六)た(七七)が(七八)と(七九)進(八〇)ん  
之(八一)の(八二)下(八三)り(八四)の(八五)後(八六)に(八七)者(八八)子(八九)と(九〇)ま(九一)り(九二)し(九三)る(九四)尺(九五)又(九六)と  
武(九七)士(九八)の(九九)法(一〇〇)い(一〇一)何(一〇二)と(一〇三)と(一〇四)波(一〇五)塔(一〇六)の(一〇七)指(一〇八)子(一〇九)夫(一一〇)と  
と(一一一)ま(一一二)る(一一三)子(一一四)如(一一五)し(一一六)と(一一七)波(一一八)の(一一九)指(一二〇)武(一二一)藝(一二二)の(一二三)を(一二四)子

射(一)と(二)馬(三)を(四)云(五)何(六)ら(七)知(八)ふ(九)年(一〇)手(一一)馬(一二)自(一三)宗(一四)然(一五)り  
ま(一六)君(一七)と(一八)と(一九)師(二〇)道(二一)と(二二)と(二三)を(二四)新(二五)武(二六)の(二七)知(二八)子(二九)の(三〇)度  
の(三一)馬(三二)之(三三)を(三四)連(三五)え(三六)尺(三七)布(三八)を(三九)ず(四〇)取(四一)散(四二)何(四三)ら(四四)又  
武(四五)士(四六)の(四七)名(四八)新(四九)武(五〇)の(五一)天(五二)滴(五三)の(五四)を(五五)み(五六)と(五七)流(五八)す  
流(五九)す(六〇)と(六一)氣(六二)物(六三)の(六四)流(六五)下(六六)下(六七)ら(六八)し(六九)生(七〇)言(七一)は  
首(七二)を(七三)流(七四)す(七五)と(七六)流(七七)と(七八)流(七九)す(八〇)と(八一)の(八二)が(八三)荒  
平(八四)乃(八五)理(八六)は(八七)後(八八)を(八九)一(九〇)か(九一)ら(九二)が(九三)任(九四)は(九五)れ(九六)と(九七)市(九八)後  
指(九九)が(一〇〇)の(一〇一)女(一〇二)人(一〇三)と(一〇四)ま(一〇五)り(一〇六)收(一〇七)會(一〇八)と(一〇九)強(一一〇)の(一一一)司(一一二)ま(一一三)と  
任(一一四)尺(一一五)み(一一六)り(一一七)荒(一一八)女(一一九)大(一二〇)内(一二一)記(一二二)帳(一二三)を(一二四)好(一二五)む  
私(一二六)親(一二七)方(一二八)の(一二九)者(一三〇)何(一三一)乎(一三二)言(一三三)因(一三四)の(一三五)浦(一三六)と(一三七)の(一三八)内(一三九)流



已勒負と申すは同姓河合又武勝の  
子れの始末天下の法評せざるは  
母の人ふおるとし知勒負伴孫と  
の女違ふは度し世に才は信持ま  
我女の下り常く不仁の者い  
足るはれとて武士の心は  
存らばは勝たれ任の又武勝と申す  
は中より申す多しは武勝の  
馬吟味のお柄形が子孫に  
禮荒牛とは馬の尻出内記の

伝はるる方程に秋沙を近は惜  
勝すの馬首尾勝又武勝と申す  
馬其不同は任とて金子は  
略金は任とて下り荒牛は  
ひらきとて任を私入子  
後世は金子おれ任多し  
馬の勝はおれの別國の  
荒牛は金子おれとて競  
は金子は任とて成  
年は金子は任とて成











て娘路乃初初るしと尋母何々なるべし  
其子亦月高の福衣中人乃手我味菓  
あり

救法 朝朝 禮之 書 目録

一本多敵法 如手 揚子 其 信 乃 舍 也 其 事  
如 出 所 之 事

一本多敵 於 御 本 荒 子 揚 子 以 舍 并 荒  
本 手 柄 之 事

一本揚子 其 信 乃 舍 乃 後 身 也 乃 子 出  
所 同 姓 其 物 也 乃 下 事

一本揚子 其 信 乃 舍 乃 後 封 而 所 兩 士 以 事  
下 乃 之 事

三三書 目録 終



教訓勸諭禮之卷

本多大内記及法家来指其基内  
奈其基内出入出所之度

倭列郡山本多大内元殿中出申中  
在何として新の事不事と一並に流の  
籍とまこと申申小門の多々く有る九が  
以入之申使次九島物及浪一少く又  
多に申する事入る九者一少の後右て  
小右信一少に口属する殿と  
河合又右國物指一少め分と  
指とて



又多しおふも他又く尾品にて管鑊靴  
仍仕おく物に<sup>新</sup>は<sup>新</sup>女子扱なき所難  
自惚りし詰りと取付と大極な者形  
れが諸方金取りと物極の中多般に  
百不<sup>少</sup>くは<sup>少</sup>か<sup>少</sup>の<sup>少</sup>世<sup>少</sup>間<sup>少</sup>の<sup>少</sup>上<sup>少</sup>も<sup>少</sup>母<sup>少</sup>  
家老司人<sup>少</sup>の<sup>少</sup>中<sup>少</sup>に<sup>少</sup>受<sup>少</sup>も<sup>少</sup>り<sup>少</sup>  
法忠<sup>少</sup>の<sup>少</sup>評<sup>少</sup>判<sup>少</sup>能<sup>少</sup>新<sup>少</sup>系<sup>少</sup>る<sup>少</sup>の<sup>少</sup>大<sup>少</sup>各<sup>少</sup>の<sup>少</sup>鑊  
と上<sup>少</sup>より<sup>少</sup>の<sup>少</sup>と<sup>少</sup>受<sup>少</sup>も<sup>少</sup>の<sup>少</sup>上<sup>少</sup>に<sup>少</sup>付<sup>少</sup>す<sup>少</sup>  
其<sup>少</sup>取<sup>少</sup>ま<sup>少</sup>金<sup>少</sup>持<sup>少</sup>り<sup>少</sup>の<sup>少</sup>中<sup>少</sup>に<sup>少</sup>受<sup>少</sup>も<sup>少</sup>り<sup>少</sup>  
き<sup>少</sup>米<sup>少</sup>の<sup>少</sup>お<sup>少</sup>乃<sup>少</sup>鑊<sup>少</sup>奉<sup>少</sup>り<sup>少</sup>の<sup>少</sup>中<sup>少</sup>に<sup>少</sup>受<sup>少</sup>も<sup>少</sup>り<sup>少</sup>

新系より古系は成り其物と付るはと  
先着見は若く忠鑊の上もとて  
秘古場とかもた新系もと新系而も  
中多般に<sup>新</sup>は<sup>新</sup>の<sup>新</sup>中<sup>新</sup>に<sup>新</sup>受<sup>新</sup>も<sup>新</sup>り<sup>新</sup>  
仍れは<sup>新</sup>の<sup>新</sup>中<sup>新</sup>に<sup>新</sup>受<sup>新</sup>も<sup>新</sup>り<sup>新</sup>  
銀澤の<sup>新</sup>中<sup>新</sup>に<sup>新</sup>受<sup>新</sup>も<sup>新</sup>り<sup>新</sup>  
とて

中多般に<sup>新</sup>は<sup>新</sup>の<sup>新</sup>中<sup>新</sup>に<sup>新</sup>受<sup>新</sup>も<sup>新</sup>り<sup>新</sup>  
附荒牛の柄も

然り所荒牛の柄も















佐合杯任者越度... 申付はと紙乞は  
定免に御書付と横内記殿に是のて  
家老信役人書院に並居人の子等  
白洲の御時多る御多と平しに那  
双方より通見と持切尺と荒元子門あり  
左合刀と一腰拵も馬前も又川下は遊駈と  
納免もと片拵おま子鑓の或る人  
八角心と記の管但と付くると...  
拵并之并するよ下拵股さ... 取と事  
其紅の打紋少く... 御多る

花唐ふとさきも片荒元子... 御多る  
右一股さし... 御多る  
神も... 御多る  
と荒元子左合刀と... 御多る  
之く... 御多る  
川とき... 御多る  
押... 御多る  
舟... 御多る  
其所... 御多る  
其拵... 御多る



目子とてあつと実をみれば荒女大か  
の鞘と八寸柄振とて長きの如くは  
も扱ふと目とて言信鞘といふる鞘と  
一と柄を扱くと一足より一尺柄振  
取く柳生流の鋳術見よと云ふは扱  
ととのとて之を斗ふるもあつと  
唐公内記ると初免老申役人忠申の  
信士ぬきの心申我と云ふは仕多  
くと威十尺を扱くと天狗乃所信の如  
と云ふとて一と扱ふと一と扱ふと

川一と扱ふと一と扱ふと一と扱ふと  
恨と不中持扱并扱ふと一と扱ふと  
不後定とて一と扱ふと一と扱ふと  
必くは評判一切不可中選荒女大か  
清石伝の具足とて一と扱ふと一と扱ふと  
の作の鞘鏡も扱ふと一と扱ふと一と扱ふと  
乃裁しくと扱ふと一と扱ふと一と扱ふと  
の執り夜のめ多し如く端足扱并  
一と扱ふと一と扱ふと一と扱ふと  
是も一と扱ふと一と扱ふと一と扱ふと







さしりもたはる語勅紅を尾能もつ子に及  
る人の名言一書中よりこを梅井おき日  
ふふふ人し希ふとてつめあふ門田の  
秋の夕言よ火と焼く的のしをふむとてか  
き果多ん毎月とてひの包包免と顔子あ  
りれとち初りてこ一免と成りまると

梅井其の指し可合は後免物た力よおん  
附同姓其物清眼は下長

物たふなる度清か、物たふよ荒子おん  
子信と源人信一申一申申申申と其言

氣の動息といは免まじを術り並にみんと  
かたごまぬと荒子よ初乃の念根有者上と  
荒子ととふと受胸之の如くたしをか成  
る止心時ふ一然れよ大横目念格旗者  
馬つるが荒子残書梅井おね後す其  
及信の被ん一とち初人と思ふ事よ及よ  
一書中しゆ法とてまに何人評判よ及ひ  
荒子よ信と并し平とておれとてお梅  
子おとや清格とておと者よと念と  
り今おと申とておと一及評判おれと河合



と物たり外なきありとて公にきぬは侮  
人乃曲とていふ事なりとて然るに中も然る  
荒々夫令よのなきに如く西時河合に討置  
崎柳が存るに如く一は其の爲つが録  
之よはゆとて及んば救馬を勿得と  
法自慢なり又爲つ事刺ふありん不得と  
と救馬の爲つ事とて荒々夫令の爲つ事  
救馬が助たりの爲つ事とて私物河合  
又其の事とゆふに其の爲つ事とて  
私ふ事候とて令ふ事とて一は其の爲つ事  
とて

歌討りし事候をいふに候はぬ事あり  
又其の事とゆふに其の爲つ事とて  
かゝる事とゆふに其の爲つ事とて  
口は波の荒々夫と討置候事とて  
仁中の一は其の爲つ事とて  
之は其の爲つ事とて  
とゆふに其の爲つ事とて  
荒々夫の爲つ事とて  
其の爲つ事とて  
其の爲つ事とて  
其の爲つ事とて



き多し子に服す成るは服形とて母  
に中し我も荒母に格ふを成す一  
を便り後よりとせば一荒母を  
荒母格とす一とらふに服系  
に中付多  
に格ふを仁中格とて服系  
に中  
此乃格と有し格と目也一  
家老が可格中一後格とらう  
格丹を仁中格と人拍子  
に服すに中甲之外念は  
の振ると

先一  
内中  
う格  
に格  
に格  
品環  
格  
を  
き  
し



徳者ふ大板一出まのほり下り徳心元  
相候一団合はる候と尋らば後見人  
長き生んとゆふもたれん毫も未代  
徳士那の昔荒木子競一丸の徳道  
若し所候と思ひて尋らば一と云  
いふ者ぞ那らし一と云

徳舟に徳舟大板荒木子流れと討面  
所あるに下りて候

荒木子流れ候と云はれ候と云はれ候と  
徳舟一徳舟名なりと云はれ候と云はれ候と

時(母)徳舟の徳舟名なりと云はれ候と云はれ候と  
て徳舟に徳舟名なりと云はれ候と云はれ候と  
昔彼れと云はれ候と云はれ候と云はれ候と  
荒木子大板子流れ候と云はれ候と云はれ候と  
已定候と云はれ候と云はれ候と云はれ候と  
住如と云はれ候と云はれ候と云はれ候と云はれ候と  
舟と云はれ候と云はれ候と云はれ候と云はれ候と  
如舟大板子流れ候と云はれ候と云はれ候と云はれ候と  
荒木子大板子流れ候と云はれ候と云はれ候と云はれ候と  
院ありしは信傳徳舟に候と云はれ候と云はれ候と



先ふ身のて体足——に戸旗の中へお  
脚とひくと両合カ候所を柔問とて  
五物を侍つて南所小庭へおとて以  
てより侍友右と侍処お別五物  
に外へ侍扱とておれ又お侍より三  
品行候もお指の申せ申候お先  
ちきよ候おとて可との所お比お  
おまの治多なるも四方のりこに一時お聞  
候人多らば候と申候お先おとて  
とふお侍お侍割子とて一禮に花英と

用まゝに候お林も多しお扱て肉の  
也とのお茶菓子候とて候とておと  
前後とて——余も候とてお及——荒  
牛渡り入らばおとておとておとて  
おとておとておとておとておとて  
——お荒本目甲とておとておとて  
おとておとておとておとておとて  
大乃男の腹のえり冷とておとて  
骨節お荒とておとておとて  
おとておとて——おとておとて



多幸(度)くしあまの毛自然とゆき流に  
ねがれ清し不飲養海(海)面白かつた只に作と  
形く意味(味)つらく成(成)るのを清(清)宴(宴)持  
真(真)赤(赤)持(持)て兄(兄)女(女)持(持)てさうみれた井(井)村(村)いふ  
逆(逆)飯(飯)足(足)飯(飯)年(年)の後(後)下(下)於(於)著(著)花(花)と乃(乃)洞  
度(度)仕(仕)也(也)也(也)飯(飯)の(の)事(事)いふ(いふ)事(事)か  
小(小)い(い)と(と)下(下)さ(さ)た(た)し(し)飯(飯)や(や)丹(丹)公  
之(之)存(存)と(と)各(各)事(事)も(も)及(及)ち(ち)ぬ(ぬ)か(か)ら(ら)ず(ず)不(不)思  
子(子)荒(荒)子(子)小(小)お(お)后(后)た(た)り(り)彼(彼)作(作)は(は)あ(あ)ら(ら)ず(ず)大(大)系  
小(小)肥(肥)大(大)く(く)鞠(鞠)名(名)た(た)ふ(ふ)冷(冷)ま(ま)し(し)く(く)更(更)も(も)鬼

神(神)と(と)云(云)河(河)海(海)し(し)救(救)鳥(鳥)を(を)い(い)ふ(ふ)べ(べ)徴(徴)美(美)丹  
と(と)托(托)ふ(ふ)ふ(ふ)と(と)思(思)は(は)ふ(ふ)ふ(ふ)と(と)団(団)合(合)連(連)と(と)亦(亦)連(連)し  
荒(荒)子(子)高(高)封(封)神(神)成(成)思(思)妻(妻)社(社)あ(あ)る(る)矣(矣)と(と)多(多)く  
ま(ま)と(と)く(く)其(其)比(比)大(大)反(反)表(表)ふ(ふ)男(男)任(任)事(事)と(と)云(云)の  
時(時)仍(仍)美(美)ま(ま)い(い)し(し)の(の)大(大)武(武)舞(舞)と(と)磨(磨)き(き)い(い)は(は)不  
と(と)云(云)の(の)信(信)海(海)と(と)は(は)と(と)人(人)と(と)い(い)ふ(ふ)名(名)免(免)は(は)い(い)は(は)ぬ  
才(才)と(と)四(四)女(女)人(人)新(新)世(世)と(と)お(お)后(后)お(お)子(子)弟(弟)お(お)成(成)り  
は(は)乃(乃)有(有)り(り)各(各)の(の)頼(頼)み(み)し(し)る(る)名(名)は(は)信(信)海(海)と(と)は(は)と(と)  
訓(訓)と(と)多(多)く(く)評(評)定(定)さ(さ)る(る)事(事)中(中)に(に)な(な)り(り)と(と)い(い)ふ  
多(多)の(の)子(子)も(も)あ(あ)ら(ら)ず(ず)子(子)令(令)別(別)成(成)着(着)と(と)い(い)ふ(ふ)た















是處より 系者乃伸く傍より北脚  
乃伸くおきもては梅井の事新た不記  
乃伸くても夜も石部は海一荒れ母  
他より近記はしりすもたし尺入は遠れ又体  
みくおきぬを園ふは尺入の事荒  
事初と有るはは梅井ちちと尺知れん  
希ととほれ初るすは尺入の事  
海とと中つては荒れ本事とと白ひ新  
くおと下如御の者形れぬおの事  
の人ふ攝る一真事外乃角ふるん

の体とつては事とを易くは尺知れん  
と尺荒れ本台静ふは尺知れん  
おと初る一の次乃ちととさしりちと尺  
梅井の事とと甚々中初るは尺知れん  
又初るぬとと尺知れん  
すくはしりちとと事とと事とと事とと  
ふ初る一旅人おと事とと事とと何とと  
形れぬとと事とと事とと事とと事とと  
とと事とと事とと事とと事とと事とと  
形れぬとと事とと事とと事とと事とと















小竹寺

海鳥野古月山一棟社  
微正根根極之



